ISSN 2186-5647

5-39

地域再生計画における地域住民による文化遺産の活用について

－千葉県鴨川市域嶺岡牧地域　石井牧士家を対象として－

日大生産工(院)　○高木 大輔
日大生産工　　篠崎 健一

1. 背景

千葉県房総半島南部の嶺岡牧地域では、地域住民が中心となり、持続的な文化遺産*1の再生を足がかりとした地域再生が行われている。

牛村（2017）[1]は社会的実験を通した「嶺岡牧再生マネジメント実証」をかかげ、これまでの嶺岡牧地域再生のあゆみと従来の生態保存から脱却し、嶺岡牧に関連する文化遺産を対象に、管理放牧を行っていた時の姿を、現地で、本物で、生きた形で嶺岡牧を理解することが可能な再現利用型再生をめざす地域再生モデルを示している。牛村の取り組みは、その後の嶺岡牧地域での地域再生の土台となっている。現在、嶺岡牧地域では、嶺岡牧スチュワード講座を経て、地域への理解を深めた3名の嶺岡牧スチュワード*2（以下、スチュワード）が文化遺産の日常的な管理主体となることに加え、地域で生活をしているカタリスト（内部カタリスト）*3として地域住民を先導している。講演や現地学習の際は、活動を円滑に進めるファシリテータの役割を果たすとともに、嶺岡牧の姿を伝え、歴史を語り、嶺岡牧地域の魅力を伝えている[2]。また、数名の研究者は、地域に入ることで、嶺岡牧スチュワードの養成と活動への助言により、活動の促進を図るカタリストとして（外部カタリスト）、地域住民を中心とする地域再生計画を実践している。研究者は現地に入り、地元住民と一緒になり活動をすることで、地域への理解を深めるとともに、現場を動かしていく計画実施主体としての役割を果たしている[3]。本来であれば地域住民を先導すべき行政（鴨川市、南房総市）の動きが鈍いため、行政に代わり嶺岡牧スチュワードがその役割を担っている（Fig. 1）。

一方で、地域再生に文化遺産を活かす取り組みが全国で増えてきている。文化遺産はその価値の維持を図る保存が必要だが、現在も生活の中で機能している現代の建造物や民家などの文化遺産を中心に公開に限らず宿泊や展示の開催など継続的な活用と保存をする取り組みが増えている。また、地域の歴史、風土、文化、暮らしによって地域の個性はつくられ、それらの理解に欠かせないものが文化遺産である。文化遺産を地域再生に活用することは、他の地域にない独自の価値を示すこととなる。

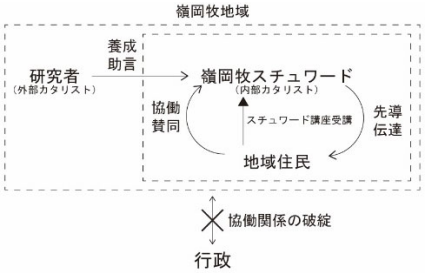

Fig.1　地域再生を行う主体の関係図

2. 研究目的

本研究では、藤島、牛村による実践的な取り組み後、嶺岡牧スチュワードを中心とした地域再生が継続されている嶺岡牧地域の実態を把握し、その魅力と課題について整理をしたのち、新たな活動拠点施設での持続的な文化遺産の活用を行う地域再生システムを構築することを目的とする。また、文化遺産を活動拠点施設として活用する前段階において、複数のプログラムを実行し、その効果と本格的な活用に向けた知見を得ることを目的とする。

3. 研究方法

筆者は、2020年2月より嶺岡牧地域に足を運び、ワークショップでの計画作成からその実践および日常的な文化遺産の管理活動に加わり、持続的な文化遺産を活用した地域再生システムの構築を図っていく。

---

*1 ここでの文化遺産とは、文化財保護等で定義され、指定、登録等をされている事物に限らず、文化活動により生み出された有形、無形の文化的価値を有する事物や事象を広く対象とする。

*2 文化遺産である嶺岡牧及びその関連遺産を持続的に資源化および管理するマネージャー。

*3 カタリスト（catalyst）とは、「触媒」を意味する言葉であり、嶺岡牧地域では活動を促進させる主体を指す。

Utilization of cultural heritage by local residents in regional revitalization plan
－For the Ishii mokushi in the Mineokamaki area of Kamogawa City, Chiba Prefecture－

Daisuke TAKAGI and Ken-ichi SHINOZAKI

4. 嶺岡牧および嶺岡牧地域概要

嶺岡牧は、鴨川市と南房総市にまたがる嶺岡山のほぼ全域とそれに隣接する柱木山に形成される。かつて関東近郊に存在した千葉県の小金牧と佐倉牧、静岡県の愛鷹牧とともに江戸幕府直轄牧の１つである[4]（Fig.2）。他の3牧とは異なり、現在でも野馬土手、馬捕場跡、木戸跡、馬の水飲み場などの遺構が残り、当時の牧の様子を知る重要な手がかりである。山地につくられた唯一の牧であり[4]、海が望める広々とした草地に馬や牛が群れている美しい原風景が存在していた。東西に約16km、南北に約10kmあり[5]、嶺岡東上牧、嶺岡東下牧、嶺岡西一牧、嶺岡西二牧、嶺岡柱木牧の嶺岡五牧よって構成される。牧士という嶺岡牧周辺に暮らす農民が牧を管理していた。

そのような嶺岡牧を中心とした地域が嶺岡牧地域であり、その範囲は、北は清澄山系の麓から、南は館山と千倉までにおよぶ（Fig.3）。これは牧の管理に駆り出されていた農民が生活をしていた集落の範囲と地域食である「チッコカタメターノ」を食している範囲一致する[6]。チッコカタメターノは、牛の初乳を「捨てるのはもったいないから」という考えから、固めて食べている地域の伝統食であり、「チッコ」は安房地域の方言で「乳」のことである。その料理法は家庭ごとにアレンジがあり、この地域では、牛の初乳を料理に用いる地域の食文化が現代に受け継がれている。

牧の一部がある南房総市は、江戸幕府八代将軍の徳川吉宗が嶺岡牧に白牛3頭は放ち、この白牛の乳から栄養のある薬餌「白牛酪」を作らせたことから酪農発祥の地と言われる[6]。さらには、明治乳業、森永乳業、カルピス、和光堂などの製乳業で知られる企業の誕生地が嶺岡牧周辺に集中している[7]。

嶺岡牧地域では、山と田と集落による里山、自然豊かな風土、農業や酪農、漁業などの生業と結びつく地域の景観が残されている。このように嶺岡牧地域は、多くの文化遺産があり、多面的な魅力に溢れている。

2021年2月27日	嶺岡牧講演会 ミニシンポジウム歴史文化再生を計画する
2021年3月7日	嶺岡牧・松本牧場の里山酪農復活草刈り大作戦
2021年3月28日	嶺岡牧スチュワード講座
2021年4月11日	ワークショップ 嶺岡牧遺産を資源にする方法は？
2021年5月21日	嶺岡牧セミナー「嶺岡紀行」を読む_5&6
2021年6月13日	石井牧士家再生PTG会議
2021年6月14日	石井牧士家の土間を清掃
2021年6月17日	嶺岡牧エクスカーションに向けた整備
2021年6月20日	嶺岡牧エクスカーション「嶺岡紀行」を歩く_6
2021年6月27日	嶺岡牧スチュワード講座 bachelor コース
2021年7月9日	ファシリテータ会議
2021年7月11日	大山千枚田草刈り
2021年7月11日	嶺岡牧周辺に450基建つ馬頭観音を巡るセミナー
2021年7月16日	嶺岡牧サロン 歴史体験計画
2021年7月25日	嶺岡牧スチュワード講座 bachelor コース
2021年7月31日	ミニ企画展 展示替えの作業
2021年8月7日	酪農のさと パネル展 展示解説
2021年8月20日	一般社団法人嶺岡牧士家保存活用協会 設立総会
2021年8月22日	嶺岡牧スチュワード講座 bachelor コース
2021年8月29日	大山千枚田稲刈り
2021年9月3日	嶺岡牧エクスカーションに向けた整備 嶺岡東牧馬捕場
2021年9月9日	旧水田家住宅見学
2021年9月10日	嶺岡牧エクスカーションに向けた整備 嶺岡東牧馬捕場
2021年9月12日	馬頭観音を巡る
2021年9月19日	嶺岡牧エクスカーションに向けたルート確認
2021年9月20日	嶺岡牧エクスカーション
2021年9月24日	嶺岡東牧の整備
2021年9月24日	一般社団法人嶺岡牧士家保存活用協会 第3回総会
2021年9月25日	嶺岡牧講演会
2021年9月26日	嶺岡牧スチュワード講座 barchelor コース
2021年9月26日	千葉県酪農の里 所長へのインタビュー

Fig.2　現地活動記録

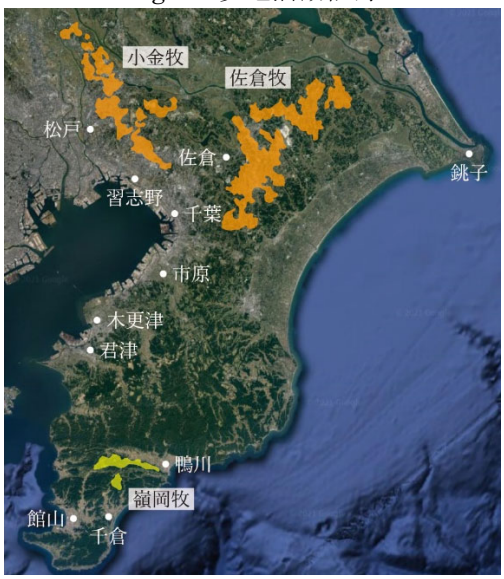

Fig.3　千葉県内の江戸幕府直轄牧

（日暮，千葉（2013）を参考に作成）

Fig.4　嶺岡五牧と嶺岡牧地域の範囲

（日暮，千葉（2013），日暮（2016）を参考に作成）

5. 嶺岡牧地域の魅力

嶺岡牧地域の魅力としては前述してように歴史ストーリーをもつ文化遺産が地域に多く存在していることに加え、嶺岡牧スチュワードの存在をあげる。スチュワードは、2020年7月より千葉県酪農のさと*4（以下、酪農のさと）で研究者によって開催されている「嶺岡牧スチュワード講座」に全12回に出席をし、最後の認定試験に合格したのち取得することができる。ビギナー、マイスター、ドクターの3コースがあり、2021年度は、昨年度にマイスターの資格を取得した3名がドクターコース、1名がビギナーコースを受講している。一方で、この座学での指導のみがスチュワードの養成ではない。彼らは、千葉県酪農のさとでの講演やパネル展の展示解説、特別展の展示替え、馬頭観音の洗浄、馬捕場や野間土手などの山の草木に埋もれている遺構の除草作業、嶺岡牧エクスカーション*5のルート上にある倒木の除去、牧士住宅に保存されている民具や古文書の記録作成などの文化遺産の保存活用に向けた活動は、文化遺産とその保存活用への理解を深める実践的な学びの場となっている。筆者もスチュワードに同行し馬捕場の除草をした。熊手で斜面をなぞるように草木を集めることで、目視では確認しにくい、凹凸のある複雑な地形を体感することができた。

民具と古文書の取り扱いや遺構を見た者にその理解を促進させる草刈りの手法など簡単ではないことも多いが、現地で活動を行う研究者から教えを受けている。

このように実践的な知識と技術を身につけているスチュワードはこの地域において、文化遺産活用の担い手であるため、その活動が活発となり、スチュワードが増えることは、持続的な文化遺産の活用において必要不可欠であると考える。

次に、実際に現地に立つことができることをあげる。牛村（2017）[1]は嶺岡牧地域において、嶺岡牧調査成果を随時公表することで、普及学習を図ってきた。さらに、嶺岡牧調査の普及教育は、アクティブラーニングを基本とし、嶺岡牧に実際に立ち考え、思いをめぐらすことを重視した結果、座学と比べて著しく学習効果が高いと述べている。

現地に立つことで講演会などの座学で得た歴史の知識とリアルな現地が結びつく感覚がある。草木の中にある石垣の野間土手が放つ厳かなで存在感のある姿やかつては牛や馬が放牧されていた土手の中から里や海を眺めたときの、美しい風景などの魅力は、現地を歩かなければ体感することはできない。また、嶺岡牧地域の文化遺産は広範囲に点在しており、サインなどの標識も少なく、山の中では目印となるものは存在しないため、研究者やスチュワードの案内なしで巡ることは難しい。参加者の1人と筆者は、嶺岡牧エクスカーション後のスチュワード講座にて地図を広げながら当日のルートと文化遺産の位置を確認した。地図上で当日のルートをなぞり、確認することで文化遺産の位置関係に対する理解を深めるとともに、巨大な牧の全体像と牧での暮らしの様子をつかんでいく感覚を実体験することができる。

Fig.5　嶺岡牧地域の文化遺産例　（撮影日：2021.3.7-2021.9.26）

（日暮（2013），日暮（2016）を参考に作成）

*4 千酪農やその他の畜産に対する理解を千葉県民が深めることを目的に千葉県が建設したビジターセンター。

*5 研究者の案内によって嶺岡牧地域内の文化遺産を巡る、現地体験型のプログラム。

6. 牧士石井家

講演会や地域再生に向けた会合などの嶺岡牧地域での活動は、酪農のさとや地域の公民館を借りて実施されており活動拠点が存在しない。そこで、石井牧士家を地域の活動拠点として保存活用する計画が進められている。

坂東にある石井牧士家は、牧士が生活していた住宅である。牧士は世襲制であり、石井家は江戸幕府直轄牧となった当初から幕末まで牧士を勤めている[8]。牧士の家では、病気の馬を家で飼い治療し、家にある馬場で調教するなど、牧の一部の機能を担っていた[4]。牧士住宅は、嶺岡牧を語る上では、欠かすことのできない存在だが、ほかの牧士住宅は建て替えや修復によって牧があった頃の姿が失われている。その中で、石井家は母屋、蔵ともにその姿を残している。蔵は嶺岡牧地域にある建造物で唯一の江戸時代の建造物であり、嶺岡牧が牧であった姿を見ていた貴重な文化遺産である。また、古文書や民具などの文化遺産が多く保管され、馬場跡や歴代の石井家の牧士が眠る墓地も維持されている。一方で、長年の劣化により母屋、蔵ともに修復の必要があり、特に蔵については、2019年の台風被害により損壊の危機にある。

7. 活動拠点の整備

これまで嶺岡牧地域で行われてきた活動のための活動拠点として、石井牧士家を整備するための第一歩である、一般社団法人嶺岡牧士家保存活用協会が2021年9月30日設立された。

1980年に石井牧士家当主が石井家及び石井家に保存されている文化遺産の保護に関して研究者に相談したことが始まりである。2021年4月11日の計画づくりのワークショップにて法人を設立する方針が決められ、2021年5月13日に外部カタリストである数名の研究者が集まり検討が行われた結果、税制上の優遇などを考慮し、非営利型の一般社団法人として会の設立をすることとなった。設立総会が2021年8月20日、8月31日、9月24日と行われたのち2021年9月30日に一般社団法人が設立された。今後は、石井牧士家を活動拠点として整備することで、損壊状態である石井牧士家の保存にとどまらず、活用をすることで、ここを拠点に生活を送っていた牧士の暮らしを体験することが期待できる。

Fig.6　台風で損壊した石井牧士家の蔵

8. 今後の課題

今後は、活動拠点での持続的な文化遺産の活用による地域再生システムを構築することが課題である。そのシステムには、嶺岡牧スチュワードの存在が不可欠であり、その活動を普及し、活動を活性化させる方法を検討する必要がある。さらには、活動拠点を活用した座学ではない石井牧士家に関する理解を深める方法として、石井家当主の語りを集める、石井牧士家の図面の作成および修復箇所の調査、牧士の暮らし体験に向けた畑づくりのプログラムを本格的な活用の前段階にて実証検証することで、本格的な活用に向けた計画と効果を検討する。

参考文献

1) 牛丸展子,「嶺岡牧再生マネジメント実証」方式, 酪農乳業史研究, 第 14 号, (2017), pp. 23-30.

2) 藤島祥枝, 嶺岡牧におけるカルチュラルネイチャー・スチュワードによるグローバルな地域再生, 私の考える日本のサスティナブルエリアデザインとコミュニティアーキテクト, 日本建築学会, (2009), pp171-174.

3) 佐藤奨平, 住民参加型地域開発マネジメントにおけるカタリストの役割-嶺岡牧再生活動のケーススタディ-, 参照2021. 10. 1 〈https://apcagri. or. jp/apc/staffcolumn/4467〉

4) 日暮晃一, 千葉いずみ, 徳川吉宗最高の江戸幕府直轄牧 嶺岡牧, 千葉県酪農の里/嶺岡牧研究所, (2013), pp. 1, 11

5) 日暮晃一, 個性的な嶺岡西一牧の世界, 千葉県酪農のさと 嶺岡牧講演会 嶺岡牧の姿に迫る, 千葉県酪農の里/NPO 法人エコロギー・アーキスケープ, (2017), pp. 1-8.

6) 日暮晃一：大山の食べ物 チッコカタメターノ料理, 非営利特別活動法人大山千枚田保存会, (2016), pp. 1, 60-63

7) 日暮晃一, 牛丸展子, 千葉いずみ, 日本近代酪農・乳食文化の源流 嶺岡牧, 千葉県酪農の里/嶺岡牧研究所, (2014), pp. 2-3.

8) 鴨川市史編さん委員会, 鴨川のあゆみ, 鴨川市, (1998), pp. 118-126.